

# 指導資料



鹿児島県総合教育センター

## 教育相談 第125号

- 小・中・高・特別支援学校対象 -  
平成20年10月発行

### 不登校の解決に向けた児童生徒の アセスメントとチーム支援の進め方

不登校児童生徒数は、全国的に、近年の減少傾向から平成18年度は増加に転じ、平成19年度も増加している。当教育センターに寄せられる相談の中には、児童生徒や保護者の気持ちを理解した対応が十分でないため不登校が長期化したと思われる事例も少なくない。

そこで、本稿では、不登校の解決に向けた児童生徒のアセスメント（理解と適切な対応の見立て）とチーム支援の進め方について述べる。

#### 1 現状と課題

平成19年度の県内の不登校児童生徒数は1,641人で、前年度より73人増加している。また、学年別にみると、小・中学校では、学年が進むにつれて不登校児童生徒数は、増加している(図1)。特に、前年度からの

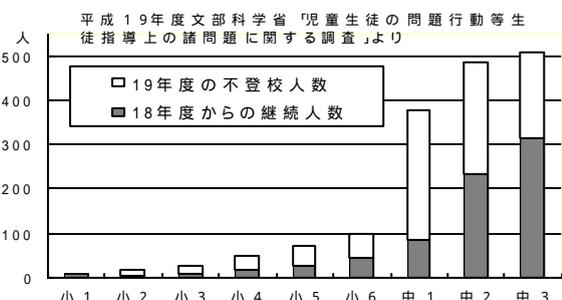


図1 不登校児童生徒数の学年別内訳と前年度から継続している児童生徒数

継続者がその半数近くになっていることや、中学1年生で不登校が急増していることは注目すべき点である。

このような不登校の解決に向けては、次のような課題があると考えられる。

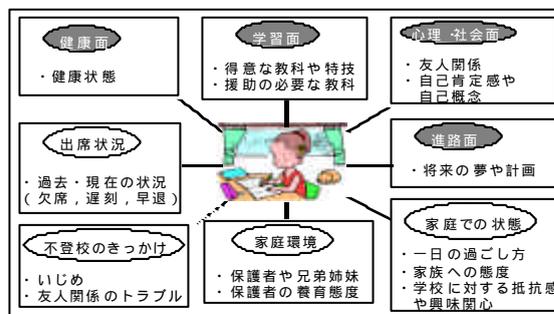
- ・ アセスメントが十分でないため、どの児童生徒にも同じような対応になりがちである。
- ・ 本人や周りの人のもつ力（リソース）を生かし児童生徒や保護者の気持ちに寄り添いながら共に再登校に向けて取り組む体制が十分でない。
- ・ 解決までの段階的な見通しが十分でないため、かかわる人に不安や不満が生じやすい。

#### 2 不登校の解決に向けた児童生徒のアセスメント

適切な支援の方法を判断するためには、個々の情報をまとめて、当該児童生徒の状況を正しく理解することが必要である。

##### (1) 多面的な理解

学校内外から多面的な情報収集を行い、個別理解を深めることが大切である。



筑波大学 石隈利紀教授らの視点

図2 個別理解を深めるための主な観点

## (2) 発達段階ごとの特性の理解と対応例

個々の状況を把握するとき、発達段階による特性に配慮することも大切である。

### ア 小学校 は対応例

- ・ 母子関係が密着しすぎることで、入学しても母親との分離に対する不安が残り、登校を渋る場合がある（母子分離不安）。
- ・ 自分の気持ちを相手に伝えることができなかつたり、集団の中に入れなかつたりするなど、ソーシャルスキルが身に付いていない。など

- ・ 母子分離不安が考えられる場合、無理に引き離さずに、保護者と相談の上、保護者の授業参加や参観、親子登校などを通して、少しずつ不安が取り除かれるように配慮する。
- ・ 当該児童の気持ちに配慮しながら、学級全体や個別にソーシャルスキルトレーニングなどをとおしてスキルへの自信をつけたり、教師も一緒に友達と遊ぶ体験を多くさせて楽しさを味わわせたりする。など

### イ 中学校

- ・ 心身の発達のな変化が最も著しい時期であるため、心理的に不安定になりやすい。
- ・ 現実と理想のずれによる否定的な自己概念を生じやすく、友人関係のもつれや他人の視線が気になるなどがきっかけになり、集団の中での活動ができなくなる。など

- ・ 養護教諭と連携を図りながら、ストレスの解消やリラクゼーション（ストレスマネジメント）などを取り入れて心の落ち着く時間帯をつくる。
- ・ 各種エクササイズをとおして、自己理解・自己受容・他者理解・人間理解などを行う。など

### ウ 高等学校

- ・ 生徒本人の学習に対する意欲や進路への希望など登校意欲に大きくかわる。
- ・ 学校には通いたい、心理的なストレスや対人的な不安のために教室での学習などができない。
- ・ 自己概念も安定し、自我同一性（アイデンティティ）を確立し始める時期である。など

- ・ 養護教諭と連携を図りながら、ストレスの解消やリラクゼーション（ストレスマネジメント）などを取り入れて、心の落ち着く時間帯をつくる。
- ・ 進路指導を適時行い、将来に向けて個々が現実問題として向き合えるように支援する。
- ・ 必要に応じて、心療内科との連携も図る。など

## (3) 不登校の段階別状態と対応例

不登校児童生徒の状態は、時間の経過と対応によって様々に変化する。ここでは、件数の多い「不安などの情緒的混乱」タイプの例をあげ、一般的な経過を述べる。支援計画を立てるとき、不登校の段階を考慮しておくことが必要である。

### 【初期】 前駆的段階・心気症的段階

- ・ 頭痛、腹痛等身体の不調を訴える。
- ・ 早退・欠席が目立ち、登校を渋る。

学校での本人との接触をできるだけ多くし、家庭と連絡を取り合う。  
早めに家庭訪問を行い、本人の気持ちを聴く機会をつくるように努める。  
休み始めたら、まずは家庭訪問や迎えなど、登校の誘い掛けをしてみる。  
体調の不調を訴える場合、登校の誘いは控え、登校しなければならないという心理的負担の除去に努める。  
保護者に対しては、頭痛や腹痛の訴えに「治ったら起きておいで」などと軽く声を掛けて抵抗感をかき立てないような対応に努めるよう助言する。



### 【中期】 攻撃的段階・内閉的段階

- ・ 感情の起伏が激しく、攻撃的な態度をとったり閉じこもったりする。

家庭訪問は、子どもの変化に戸惑っている保護者の心の支えになることを主とする。  
暴力には毅然とした態度で臨む、暴言には反論しないが、理不尽な要求はきっぱりと断るなど、保護者に適切な対応を助言する。  
家庭訪問後の様子を必ず確かめ、今後の方針の調整をする。  
自立への期間と理解し、粘り強くかわりながら、本人の状態の理解に努める。



### 【後期】 回復の段階・登校準備の段階

- ・ 生活のリズムが戻ってくる。
- ・ 行動の変化が見られる。

定期的に家庭訪問をし、本人の話や訴えを共感的に聴く。  
本人の登校への意欲に対して、共感的に支援していく。  
再登校を焦る保護者の気持ちを受け止めながら、起床時間等を自分で決めさせる。本人の前向きな変化や成長は、ささいなことでも認め評価するなど、適切なアドバイスを行う。  
学校や学級に、再登校を温かく迎え入れる雰囲気をつくりあげる。  
本人の状態が落ち着いてきたら、無理のない目標を一緒に考える。



### 【再登校期】 立ち直りの段階

- ・ 時々休んだり、遅刻・早退を繰り返しながらも登校できるようになる。

登校後しばらくは、本人の様子を見守りながら、無理のないように配慮する。  
本人への言葉掛けを継続していく。  
教室だけでなく、本人の心の居場所の確保に努める。



月	A子・保護者の状況	主な支援
5月	<p>A子は「友達の見線がこわくて教室に入れない」という気持ちである</p> <p>A子は教育相談室登校をしてみることを決める。</p> <p>A子は時間を遅らせて、人目を避けて登校、給食時には下校(2週間)</p> <p>・母親の焦りが見られる。</p> <p>A子は緊張しやすく、過敏さと不安の強さがある。</p> <p>・母親は教育相談を受ける。</p>	<p>教育相談室への登校を勧める。登校時刻は、A子や保護者と相談してめどを決める。</p> <p>教育相談係は、相談の中で、母親の焦りを共感的に受け止めながら、A子が安心感をもてることが次の段階につながることに気付かせる。</p> <p>担任も教育相談係と連携を図りながらA子のペースを見守る。</p>
	<p><b>管理職・担任・保護者・教育相談係・養護教諭による支援会議</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 家庭や学校(相談室)で、A子に安心感を与えること。</li> <li>・ 教育相談係がA子の教育相談を開始すること。</li> <li>・ 教育相談係が保護者の心理面を支えること。</li> <li>・ 担任と保護者は連絡を取る。</li> </ul>	
6月	<p>A子は、周りの見守り姿勢に安心して少しずつ相談室登校日がふえた。</p> <p>相談の中で、A子は、家庭や学校で嫌だったことを話し、少しずつ自分の夢についても語り出す。</p>	<p>教育相談係は、定期的にA子と相談を実施する。</p>
	<p><b>管理職・担任・保護者・教育相談係・養護教諭による支援会議</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 不安になり欠席が増えたり、体調が悪くなったりするため、教室に戻ることを無理に勧めないこと。</li> <li>・ 相談室に登校しながら、教員や級友との交流を深めていく方針を立てること。</li> </ul>	
9月	<p>・ A子の母親は相談室保護者会にも積極的に参加し、明るい笑顔が見られるようになった。</p> <p>A子は明るくなったが、進路の不安</p>	<p>勉強したい人には<b>教科の教員</b>が相談室で支援することを職員会議で共通理解する。</p> <p>教育相談係は、相談室登校の保護者会を月1回開き、保護者間の情報交換や心理面を相互に支え合うようにした。</p> <p>担任は、A子の進路への思いを受け</p>

月	A子・保護者の状況	主な支援
	<p>を話すようになる</p>	<p>とめて、チーム会議を開く。</p>
10月	<p><b>担任・保護者・教育相談係、進路指導係・スクールカウンセラー(スーパーバイザー)による支援会議</b></p> <p>(新しい指導方針についての話し合い)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ A子が自分の気持ちを話せるように周りの大人がかかわること。</li> <li>・ A子が自分で目標を決めて挑戦すること。</li> <li>・ 逃げ場をつくること。(居場所)</li> </ul>	
	<p>(A子の立てた目標)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学校行事への参加</li> <li>・ テストを受ける。</li> </ul>	<p>うまくいかなかったときには家庭と相談室が逃げ場になることを確認。</p> <p>担任は、A子の目標について職員朝会で共通理解を図る。全職員で声掛け・見守る。</p> <p>養護教諭は、A子の様子を見守り、適時声掛けする。</p> <p>教科担任はA子の使えそうなプリント等を担任に渡す</p>
	<p>A子はテストを受け、担任からもらった課題をほとんど提出する。</p> <p>運動会では、学級の後ろの方で一部分だけ参加する。</p>	
11月	<p>頭痛や腹痛を訴えることが減る。</p>	
	<p>A子は勉強の遅れを不安に思いながらも、自分がいましなければならぬことを担任と確認しながら実行。</p> <p>一部分参加した文化祭では、級友から話しかけられて嬉しそうだった。</p>	<p>進路指導係が受験情報を提供。</p> <p>担任は文化祭の様子から、少しずつ活動の場を広げることを提案。</p> <p>相談室で級友と遊んだり、給食を食べたりできるようにする。</p>

不登校の解決のためには、深い児童生徒理解に基づいたアセスメントをとった個別の支援をチームで行い、学校・家庭・関係機関等が連携・協力しながら、不登校児童生徒を支援していくことが必要である。

#### 【引用・参考文献】

文部科学省 平成19年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」  
不登校といじめ問題の解決のために第2集 2008  
独立行政法人教員研修センター  
石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門  
2003 図書文化  
不登校不登校傾向児童生徒のための個別支援計画  
2008 鹿児島県教育委員会 (教育相談課)